

2024年2月25日発行

大町山岳博物館友の会 第 198 号

ゆきつばき通信



行事のご案内

令和6年度山博友の会 総会・講演会のお知らせ

講演会 共催 大町山岳博物館

「長野県におけるイワナとその増殖について(仮題)」

小松典彦さん(長野県水産試験場)

令和6年度の総会記念講演会は、長野県水産試験場研究員の小松典彦さんをお迎えして、山岳溪流に棲むイワナの生態や利用のこと、そして増殖の研究などについてご講演いただきます。

長野県は豊かな自然環境に恵まれ、美しい溪流が数多くあります。大町市にも高瀬川、乳川、籠川、鹿島川といった河川、北アルプスの雪溪から滴る冷水からなる溪流が流れ、そこに棲む魚「イワナ」は皆さんにとってなじみ深いものかもしれません。しかし、近年、災害に伴う河川改修や温暖化などによって、そこはイワナにとっては厳しい環境になってきています。今回は、長野県のイワナを増やす取り組みについて、漁業協同組合の事例や、大町市(土尻川)における研究事例についてもご紹介いただきます。

《期 日》 4月21日(日) 午後1時30分 ~ 3時30分

《場 所》 山岳博物館 講堂

《講 師》 小松典彦さん (長野県水産試験場 研究員)

《参加費》 無料

《申込み》 要事前申し込み 4月2日~18日まで 定員40人(申込先着順)

参加希望者の氏名・住所・電話番号を電話、FAXまたはEメールで山岳博物館へご連絡ください。

電話：0261-22-0211/FAX：0261-21-2133

Eメール：sanpaku@city.omachi.nagano.jp



友の会総会

講演の後、休憩、換気などを行い、令和6年度総会を行います。友の会の活動をより有意義にするために、ぜひ多くの方にご出席いただき、意見を交換いただきたいと思います。

《期 日》 4月21日（日） 午後4時00分 ～ 5時00分

《場 所》 山岳博物館 講堂

《内 容》 令和5年度の事業報告・決算報告 令和6年度の事業計画・予算案その他、会員からの提議に関する協議・決議

行事のご案内（友の会主催事業 次年度予定事業）

自然観察会 鷹狩山 小鳥の声を聞く会

小鳥の声を聞く会は鷹狩山に戻ってきます。身近で親しみのある野鳥を中心とした観察を通して、生態系や自然環境を考えます。近年の温暖化の影響や環境の変化はあるのでしょうか？友の会、博物館は1974年から鷹狩山での観察データを持っています。

《期 日》 5月12日（日） 午前7時00分～午後0時30分 小雨決行

《場 所》 大町公園 ⇄ 鷹狩山山頂（集合解散 山岳博物館駐車場）

《対 象》 子ども～大人（大町公園と鷹狩山山頂を徒歩で往復できる方）

《募集人員》 会員 20名（定員になり次第、締め切り）

《講 師》 栗林勇太学芸員

《参加費》 無料

《持ち物》 筆記用具、雨具、防寒具、帽子、観察道具（図鑑、双眼鏡などある方；貸し出しもできます）、行動食、敷物（ビニールシートなど）

《申し込み》 4月21日（日）から5月9日（木） 電話・FAXまたは直接、友の会事務局へ（Tel/Fax0261-23-6334）

《当日連絡》 090-1217-9197（丸山卓哉）



博物館からのご案内

研究報告「山のサイエンスカフェ in さんぱく 2024」

山岳博物館の職員が北アルプス周辺地域の自然科学と人文・社会科学の諸分野における調査研究、あるいは収蔵資料に関する各種情報等について研究報告・話題提供を行います。

《開催日時》 令和6年3月3日（日）・10日（日） 午後1時30分～4時

前期【3/3】

1. ライチョウのメスの鳴き声（岡本真緒）
2. 中部山岳地域における近年の気温変動（鈴木啓助）
3. 火山灰の魅力（竹村健一）

後期【3/10】

4. 高山植物ミヤマクワガタには不思議がいっぱい（千葉悟志）
5. 大町の鳥今昔（栗林勇太）
6. 大町市の昆虫の動態（清水博文）

《場所》 山岳博物館 講堂 《費用》 無料

《募集人員》 各日30名（定員になり次第締め切り） 申し込み受付中

《募集期間》 前期は3月1日（金）まで 後期は3月8日（金）まで

《申し込み》 山岳博物館に電話（0261-22-0211）、FAX（0261-21-2133）

またはメール（sanpaku@city.omachi.nagano.jp）

※感染症の状況によりマスク着用していただくことがございます。また、状況により中止とする場合がございます。当日、体調の優れない方の参加はご遠慮ください。

講演会「ニホンオオカミを探し続けて50年」

講師 八木 博氏（ニホンオオカミを探す会代表）

開催日時： 令和5年11月11日（土）

企画展「大町と絶滅動物」の一環として講演会が行われた。お話しされたのはNPO法人ニホンオオカミを探す会の代表の八木博さんで、第一人者であり、テレビでもご覧になった方もおられると思う。

苗場山での遠吠えと、のがれられたバス事故が因果か、山岳会に入りオオカミ探しが始まったという。オオカミは、作物を荒らすイノシシやシカを駆除することによって神と見られ、秩父一帯ではオオカミ（ヤマイヌ・お犬様）を祀る神社が多く、ご自身も埼玉に引っ越すなど、ニホンオオカミフォーラムなどに関わっていく。1996年には秩父野犬とされる写真を撮影し、その後も動画カメラの設置や録音に取り組み、科学的な分析も行っている。

お話は、海外、国内の標本なども紹介しながらニホンオオカミの特色などを紹介し、人間と野生動物との関りについても話された。

大変多くの参加者があり、会場からもそれらしい目撃談があり、充実した講演会となった。



報告 『善光寺街道を歩いてみようⅢ～北国西街道編～』

《期日》10月14日（日）午前8時～午後3時
 《場所》松本宿・岡田宿・刈谷原宿・保福寺宿
 《参加者》17名（講師・担当役員含む）
 《講師》清水隆寿さん（大町市文化財センター）

2年前に同題で、小川村の立屋から旧美麻村の湯ノ海までの「大町峰街道」を歩いたのが始まりで、この時応募が多かったので翌年も同じ企画を実施しました。これがきっかけになり山岳博物館清水隆寿副館長の提案で3ヵ年計画で松本から善光寺まで歩くことにしました。（宿場間はバス移動です）

今年が1年目で、松本宿→岡田宿→刈谷原宿 オプションで保福寺宿
 令和6年度 会田宿→青柳宿→麻績宿
 令和7年度 稲荷山宿→丹波島宿→善光寺宿 を予定しています。

《コースタイム》

8:00 大町市役所 ～ 池田町交流センターかえで・スイス村 ～ 9:00 なぎさライフサイト → これより徒歩9:15 出発 ～ 9:25 犀川通船の碑 ～ 9:45 浄林寺 ～ 10:00 旧開智学校跡 ～ 10:30 牛つなぎ石 ～ 10:35 中町通り ～ 10:50 源智の井戸 ～ 11:05 イオンモール付近バス乗車 ～ 11:25 岡田宿 徒歩にて散策・岡田宿跡で昼食 → 12:10 バス乗車 ～ 12:40 刈谷原宿 徒歩にて散策 → 13:05 バス乗車 ～ 13:10 保福寺宿 これより徒歩 ～ 13:30 保福寺 → 14:00 バス乗車 ～ スイス村・池田町交流センターかえで ～ 15:10 大町市役所着 解散

【資料より一部抜粋】

善光寺街道は、北国西街道とも呼ばれるが正しくは「北国西脇往還」という。中山道の洗馬宿で中山道から分かれて善光寺へと北上する街道。

※善光寺道（12宿と3つの峠）

(1)洗馬宿→1里半→(2)郷原宿→1里半→(3)村井宿→1里半→(4)松本宿→1里半→(5)岡田宿→1里半(刈谷原峠)→(6)刈谷原宿→1里半→(7)会田宿→3里(立峠)→(8)青柳宿→1里10丁→(乱橋村・間の宿)→(西条村・間の宿)→(9)麻績宿→3里(猿ヶ馬場峠)→(桑原宿・間の宿)→(10)稲荷山宿→3里(篠ノ井追分宿)→(11)丹波島宿→1里→(12)善光寺

※松本宿 …信州随一の城下町にして宿場町

宿場として諸国の人々が交流したのは、本町・中町・東町あたり。土蔵造りの街並みが改修保存されている。

※岡田宿 …幕府役人御用達の小宿

江戸方面から松本城下へ入る直前の宿として重視された。一説では、上方方面からの大名や松代藩真田侯などは、松本宿ではなく岡田宿の滞在を好んだと伝えられる。浅間温泉を控えて旅籠屋の数は少なかった。

※刈谷原宿 …古代東山道時代からの古宿

長野方面には立峠・猿ヶ馬場峠、上田方面へは青木峠・保福時峠、松本へは刈谷原峠が立ち上る山間の宿。古宿ながら古代、伊勢と東北を結ぶ官道であった東山道の頃から交通の要衝だった。

☆開智学校跡

開智学校は現在の中央1の女鳥羽川沿いで、廃仏毀釈で廃寺となった全久院を使って始まった。校舎建設に巨費を投じた影響で学校運営は財政難に陥り、一時閉校が取沙汰されたこともあったが、住民が資金を出し合うことでのりこえた。

昭和34年(1959)の台風被害で、女鳥羽川を拡幅する計画が持ち上がり校舎を移転新築する計画が浮上、昭和36年には重要文化財に指定され、指定された校舎を移転復元する計画は国により難色を示されたが、住民の熱意が実り昭和39年に移転完了。隣に新築の新開智小学校も建設された。開智学校には開校当初からの学校日誌や教材など学校生活を伝える資料を約11万点所蔵。令和元年に国宝に指定された理由はこうした明治以降の膨大な資料が残っていたことにも起因している。開智学校では開校直後から英語の授業をしたり、運動場を設けたりと国の模範とした教育が行われてきた。

国宝開智学校校舎の建設を手掛けたのは松本の大工・立石清重(1829～1894・享年65歳)であり、校舎に関する書類(設計図案・工事記録・資材帳簿)は200点に上りこうした大量の

資料が残存していたことも理由に国宝指定になった。

☆牛つなぎ石 …上杉謙信の義塩

戦国時代の永禄11年(1568)に、今川氏と北条氏が相談して甲斐国の武田信玄を抑えるため南塩を甲州と信州へ輸出することを禁じた。これを知った上杉謙信は何の罪もない領民が困ることを心配して、北塩を送るので販売せよと甲州と信州に送った。この様にして越後の塩が千国街道を通過して、大町・松本を経由して甲州に運ばれました。この塩を「北塩」と呼んだ。松本に塩が届いたのが永禄12年(1569)正月11日、以来その日を祭日として「初市」が開催されるようになったと伝えられている。「初市」は「塩市」とも呼ばれ、それがいつしか「飴」が売られはじめ、いつとはなしに「飴市」になったのだという。その塩を運んできた牛をつないだという伝説の石(この石は町整備にともない他所から本町移されたもの)。

担当役員 記



【感想文】

山博友の会 善光寺街道 感想文

鈴木 一

10月14日に行われた「善光寺街道を歩いてみよう！」に参加させて頂きました。これまで山岳博物館の講演会や自然観察会などに参加してきましたが、今年の4月には友の会に入会させて頂き、今回が初めての行事参加になりました。私自身はここ3年間のコロナウィルスの流行ですっかりステイホームが身についてしまい、足腰の衰えを自覚する中でのリハビリの意味もあって

の参加でもありました。今回、友の会の皆様と共に、秋空の下、松本市内と岡田宿、刈谷原宿、保福寺宿の史跡を巡りながらの散策はとても楽しく興味深い1日でした。史跡説明の講師の先生、企画担当の方々、そして友の会の皆様には大変お世話になり有難うございました。以下に、今回の街道散策の感想文をしたためさせていただきます。なお、文体は敬語を略した「である調」で書かせて頂きます。

長野県内で中山道から分岐して善光寺に至る街道筋は2本あり、軽井沢の追分宿を起点として佐久平を通り直江津で北陸道に合流する北国街道と、塩尻の洗馬を起点として松本平を通り善光寺手前の丹波島宿で北国街道に合流する北国西街道がある。北国西街道とは北国街道の西側を通る脇道という意味であり、正式には北国西往還というらしいが、我々長野県人には善光寺街道という呼び名の方がなじみ深いのではないだろうか。そして、今回の「歩こう企画」は3年間、3回の予定でこの善光寺街道を松本から善光寺まで、途中の車移動を伴いながら史跡や街道宿を訪れる企画であり、まずは第一段として、松本市内と岡田宿、刈谷原宿を歩き、最後にオプションとして保福寺宿にも訪れた。来年の第2段は会田宿から歩くとの事であった。



最初の松本市内では、渚のショッピングセンターでバスを降り市内方面に向かって東方向に歩き始めた。田川を渡ってからは巾上の船着き場跡や浄林寺、開智小学校跡を訪れながら女鳥羽川沿いを歩いた。国宝にも指定された開智小学校校舎は有名であるが、以前は市内中心部の女鳥羽川沿いのこの地にあったという事は初めて知った。幕末期の殿様である戸田氏の菩提寺の土地が廃仏毀釈の時流の中で市民に開放されて、その地に開智小学校が建設されたとの説明であった。東に美ヶ原を、そして西に北アルプス連峰を望み、その間を女鳥羽の清流が流れるという立地である。代々の殿様の菩提寺であったという事も考えると、まさに自然と権力と霊界の気が集まるパワースポットではないか。そして、「愛・正・剛」という校訓も掲げられたら最強の小学校の完成だな、などというある意味大袈裟な感想を持ってしまった。ちなみに、私の場合は三重県と和歌山県で3つの小学校に通い、そこでは校訓などの立派な教訓は知らずに育ったためか、一本の心棒も無いフニャフニャした人間に育ってしまい今に至る。

縄手通り近くの千歳橋前までは女鳥羽川沿いを歩き、千歳橋北側の柵形道路を観察

した後に右折して、本町通りを伊勢町通りまで歩いた。伊勢町通りの交差点では牛つなぎ石を見学したが、この石の由来となっている「上杉謙信が武田信玄に塩を送った」という伝説は、最近の歴史学会では否定されつつあるとの説明が興味深かった。その後は、白壁と土蔵造りの中町通りを東に向かって歩いた。これまでこの街並みは江戸時代の名残かなと思っていたのだが、実は明治の大火の後に火事に強い白壁の家々が建てられたのだとの事であった。その後、途中、源池の井戸を見学しながらイオンモールまで中町通りを歩き、ここで松本宿の見学は終了となり、次の予定地である岡田宿に向かってバス移動となった。



岡田宿では、岡田神社の旧参道の前にある2本の大けやきの横でバスを降りた。ここから西側に向かって旧参道を500m程行った所に岡田神社があると言う。地図を見ると、岡田神社は現存するものの旧参道は途中の南北の通りで遮られ、その先は住宅地となって参道自体は消失してしまっている。せっかくの史跡であるのに少し残念な思いであった。松本市の都市計画恐るべしである。さて、善光寺街道は



と言うと、街道沿いに岡田宿をしばらく歩き、岡田宿本陣横の岡田宿公園にて昼食となった。ここでは、善光寺街道の概略図があり、塩尻の洗馬宿から善光寺までの行程が約80kmと書かれてあった。石垣に隣席して一緒に昼食をとった方と「80kmなら2泊3日で歩けますかね。一度歩いてみたいものですね。」などと話し意気投合して愉快であった。松代藩の参勤交代では、松本宿に入る前に岡田宿に投宿するのが常だったとの案内書きがあり、これは当地が浅間温泉に近く旅の疲れをここで癒したのであろうか。いや旅の汚れを当地で清めてから府中松本宿を通過する段取りだったのだろうかなどと新たな疑問も生じることになった。

岡田宿での昼食後は再びバスに乗り、現在は松本市四賀地区となっている刈谷原宿に移動した。江戸時代には岡田宿から刈谷原峠を越えてこの宿に至る街道が通じていたが、今は山越えの道は登山道のような細道が残っているだけだという。一度この山越えの道を歩いてみたいとも夢想するが、同道の皆さんとの会話では「熊が絶対にいる」との事で、熊鈴必携の道であるようだ。今年は史上最悪の熊被害が続出しており、一人で気楽になどと言ってはられないようである。今後の山博友の会の企画に期待はできないだろうか。この刈谷原宿には戦国時代に刈谷原城があり、武田・上杉の勢力争いの中で重要な戦略拠点であったようである。武田側から見て川中島が最前線で

あるとすると、街道沿いの麻績城、青柳城は取ったり取られたりの戦場地帯で、会田城・刈谷原城は絶対防衛地帯、そして府中の松本城が兵站拠点と司令部といったところであろうか。また、かつての信濃守護職だった小笠原氏も、武田・織田が滅亡した後のしばらくの混乱状態を経た後に旧領復帰となるが、山一つ隔てた刈谷原城では上杉側への謀反の疑いがあるとして時の城主を切腹させた上で、上杉勢力からの確実な防衛のために有力な同族の重臣を新たな城主として任じている。そのような歴史上・戦略上ともに重要な場所であったにもかかわらず、不精な私は「四賀地区のどこか」位の知識しか無く、今回その実際の場所に行けたのは貴重な機会であった。にわか歴史好きとしては、刈谷原峠越えもしてみたいものだが、やはり熊が怖い。

刈谷原宿で今回の善光寺街道歩きは一旦終了となるが、オプションとして四賀地区から始まる江戸街道沿いの保福寺宿と名刹保福寺も訪れた。最後に保福寺で参拝して今日の占めとするなど心憎いまでの演出であった。保福寺宿では、さすが山博友の会の皆さんである。ウォルター ウェストンの保福寺峠越えが話題になり、なんとウェストンは人力車で峠越えをされたのだとか。最後はウェストンも見ただろう北アルプスの眺めを、と言っても山あいの保福寺宿からは槍・常念岳から燕岳くらいの間ではあるが、眺めて昔日に思いをはせながら街道歩きの旅を終えた。



最後に、今回の企画を主催して頂いた、山博副館長の講師の先生、山博友の会の企画担当の方々、ご一緒させて頂いた友の会の皆様、本当にお世話になりました。有難うございました。来年度の第2段も楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



「善光寺街道を歩いてみようⅢ」に参加して

中村 美智子

令和5年10月14日、「善光寺街道を歩いてみよう！」イベントに参加させていただき、心から感謝申し上げます。素晴らしい天候に恵まれ、最高のウォーキング体験ができました。普段は車で通過してしまう場所にも、大切な史跡が存在することを学び、新たな発見に感謝しています。

最初に訪れたのは、松本市巾上の「犀川通船船着き場」。1832年から犀川を利用した水運が開始され、約60kmにわたって物資が運ばれていたことに驚きました。しかし、篠ノ井線や陸路の開通に伴い、その歴史は終わりを迎えました。次に立ち寄

った「旧開智小学校」も印象的でした。私は国宝指定されている別の学校のことは知っていましたが、こちらに学校があった歴史や背景に初めて触れ、感動しました。

信毎メディアガーデンの西側にある「飴市の起源について記載された道標」にも訪れました。私が子供の頃、飴市は待ちに待ったお祭りでしたが、上杉謙信が塩を送った話が文献には記載されていないことを知り、残念に思いました。

「中町」通りの両側に立ち並ぶ土蔵造りの家々、火災から家を保護する目的で建てられたその姿は、大火の後の復興の証として感じられました。

「岡田宿」や「保福寺宿」など、古い趣きを残す場所も訪れ、歴史的価値の高い建物や地域を共に守っていく重要性を再認識しました。

清水先生、山博友の会の役員の皆さん、バスの運転手さん、おかげさまで充実した一日を過ごし、多くを学ぶことができました。心より感謝申し上げます。



報 告 友の会創立 45 周年記念 『長野県立歴史館と森將軍塚古墳見学会』

《期日》 11 月 5 日（日） 午前 8 時～午後 4 時 30 分

《場所》 長野県立歴史館・森將軍塚古墳・千曲市森將軍塚古墳館

《参加者》 15 名（担当役員含む）

《講師》 清水隆寿さん（大町市文化財センター）

《コースタイム》

太陽バスにて 8：00 大町市役所発 --- 9：10 長野県立歴史館（企画展、常設展見学） --- 科野の里歴史公園（屋外復元住居） --- 11：30 昼食（あんずの里アグリパーク） --- 12：30 徒歩にて森將軍塚古墳へ --- 14：30 千曲市森將軍塚古墳館見学 --- 15：15 帰路（道の駅中条に寄る） --- 16：30 大町市役所着

長野県を代表する県立歴史館なのに意外と行く機会が少ないと思われる。今回は隣接する森將軍塚古墳見学と合わせて、友の会 45 周年記念の最後の行事として実施した。

【長野県立歴史館】 千曲市屋代の科野の里歴史公園内に平成 6 年に開館した歴史系博物館で、文書館、考古館の役割もはたす。一階入り口フロア正面に受付とショップ

があり、左手は講堂で講演会などが行われている。右手は事務室の他、いくつかの収蔵庫、行政文書、古文書などの一般見学者には入れない広い区域がある。特別収蔵庫などは火災時に一瞬にして酸素を抜いてしまうような構造になっている。もちろん中に入っている人は避難してからだ。一般者が入れるのは広い階段を上った2階部分である。階段を上ると正面に廊下があり、奥の常設展示室に続く。右側は企画展示室となり、観覧券の提示を求められる。左側は図書室、閲覧室になっている。貸し出しはしないがコピーはできる。事前申し込みで収蔵庫の資料もここで閲覧できる。移動困難なものなどは特別に収蔵庫で見ることがもできる。

今回の見学は開催中の企画展「信州やきもの紀行～江戸から明治へ～」と常設展示室である。両方も職員の方に案内していただいた。企画展は江戸時代以降に瀬戸・美濃地方の技法を取り入れた信州各地のやきものが一同に集められ、大町近辺からは池田町の相道寺焼と大町市美麻の大塩焼が展示されていた。

【森将軍塚古墳】 歴史館に隣接して森将軍塚古墳館がある。背後にある有明山から北に延びる稜線の一角に、4世紀中ごろ築造された長野県最大の前方後円墳といわれる森将軍塚がある。昼食後、古墳館からのバスもあるが古墳まで歩くことにした。復元された古墳では、清水さんの解説にさらに熱がこもった。再び古墳から麓まで歩き、古墳館を見学した。2階は中央に日本最大級といわれる竪穴式石室の模型が、1階から吹き抜けになり、その全貌がまるで古墳にいるような気分で眺められる。周囲は古墳にかかわる出土品などが展示されていた。1階は竪穴式石室の内部を入れるようになっていて、実物の石積みに触れることができる。

なお、昼食は古墳館の向かい側、「あんずの里アグリパーク」のフードパークでとった。更埴市時代にあんずが縁で姉妹都市提携を結んだ宇和島市による「じゃこ天」の販売が入口で行われていた。

(宮澤記)



展示されていた大塩焼



展示されていた相道寺焼



復元された森将軍塚



フードパークの古墳カレー

【感想文】

「長野県立歴史館と森将軍塚古墳」見学会に参加して

宮島 順一

11月5日（日）例年になく暖かい気候の中を大町から小川村、長野市中条を通過しマイクロバスは山中を走る。紅葉も良く車中では清水さんより作成された資料を基に今回の見学地の説明をいただいた。予定より早く県立歴史館(来年の文化の日で開館30周年を迎えるとのこと)に到着後、「秋季企画展・信州やきもの紀行」を見学。長野県内の焼き物が展示されており、相道寺焼き等が展示されていた。その後常設展示室を見学後、科野のムラに復元されている竪穴式住居等を見学し、昼食を食べるために「あんずの里物産館」に向かった。

午後は、徒歩で約20分急坂を登り2号古墳を經由し森将軍塚古墳へ向かう。森将軍塚古墳は「森地籍」にある「偉い人のお墓」という意味であることを初めて知った。全長約100mの前方後円墳で頂上からは上信越自動車道、北陸新幹線が眼下に見下ろすことができる。また、晴れていると北アルプスの一部を望むことができるという。

王は素晴らしい場所にお墓を作らせた后感心した。要所要所で清水さんに説明をしていただいた。その後「森将軍塚古墳館」で実物大のレプリカ竪穴式石室を見学、終日秋晴れに恵まれ有意義な見学会が無事終了した。



報 告	初春「そば打ち講習会」
-----	-------------

《期日》1月21日（日）10時～13時半
 《場所》大町市平公民館（働く婦人の家）
 《参加者》15名（講師・役員含む）
 《講師》長沢正彦氏（友の会顧問）



友の会では、“郷土食を学ぶ”をテーマにそば打ち講習会等を開いてきましたがここ数年お休み、久々の開催でした。

講師の長沢顧問から、以前友の会講演会で市川健夫先生の「信州の郷土食について」学び、信州のハレの日に作られるそばについて触れられました。過去のそば打ち講習

会について準備された資料を基に説明がありました。ハレの日に、親戚の人や近しい友に心を込めて打ったそばを振舞うことが出来る、そんな想いが込められたレクチャーで始まりました。



調理台ごとに3

名に分かれ、そば粉、中力粉を参加者が計測することから始めました。講師からそば粉、中力粉を混ぜ、水回しをして捏ねてそば玉を作るところまで実演で学習「そば打ちは水回しが肝心」と強調されていました。その後、各自が真剣にそば粉の水回しを体験しました。

次いでのし棒で打ち粉をふってそば玉を伸ばし、そば切りまでを実演から学び、再び各自で伸ばす、切るまで行いました。そば玉が固い、柔らかすぎるなどの声が出て講師が各調理台を回り助言をしながらそば玉の修正に奮闘されていました。

最後に、茹で方の講習をしました。ネギ、大根おろしの薬味、つゆの準備をして茹で上がり待ちました。お湯の沸騰に時間を要しましたが、少々太目のそばでしたが、そばの香りがするそばに仕上がりました。

久しぶりの講習会で準備不足の面もありましたが、男性の参加者が多く、そば打ちの道具の準備、片付けの協力、経験者の太田さんの助言など皆さんに助けられました。多忙の中、事前の打ち合わせ、当日は早朝から指導いただいた講師の長沢顧問、参加者の皆さん、本当に有難うございました。

〔講習会に使用した食材〕

○そば＝そば粉 400 g ・ 中力粉 100 g ・ 生卵 1 個 ・ 水 200 cc 位、打ち粉（適宜）

○薬味＝ねぎ、ねずみ大根（適宜）

○つゆ＝だし 3 : かえし 1（各自好みに応じて加減）

だ し＝水 1800 cc ・ 昆布 30 g ・ 削り節 50 g

かえし＝醤油 300 cc ・ みりん 300 cc

つゆ作りは、沸騰は禁物、時間をかけてじっくりと作るのがコツのようです。

有川 記

【感想文】

「そば打ち講習会」に参加して

辻 亘

これまで未経験であった「そば打ち」。「いつかやってみたい!」と思っていましたが、新年最初の行事案内に惹かれてすぐに応募しました。当日は平公民館の調理室で各班3~4名に分かれての実習(幼かったころの、小学校の家庭科の授業をふと思ひ出す)。工程ごとに講師役の長沢さんから手順や注意点などを分かりやすく説明いただき、実践へ。「水回し」、「のし(そば打ち)」、「切り」など、そばづくりには幾つかの工程がありますが、特にそば粉と小麦粉に混ぜる水の量(「水回し」と、それにより、ちょうどよい硬さのそば玉ができるかが、かなり重要なポイントのように思いました。自分なりに「硬すぎず、緩すぎず、ちょうどよい硬さの粘土」のイメージで調整しながら、それに近いものが出来たと思います。

また、そば玉を伸ばす時の「のし棒」の使い方(誤って指でそばに触れると、そばが破ける)、切る際は「かなり細く」を意識する(うっかりすると「きしめん」のように太く切れてしまう)などは、初心者の私には特に苦労した点でした。

そしてイベントのもう一つの楽しみは、皆で手打ちしたそばを試食すること。作者によって面の幅、食感は様々。でもそこが、手作りの良さ。私は、「きしめん」のように太く切れてしまった一回目のそばは持ち帰り用のタッパーに仕舞い、一回目よりも薄く細く切れた二回目の分を試供させて頂きました。経験者の方から「お蕎麦っばい!」と言ってもらえたので、初体験にしては上出来ではなかったかと思ひます(笑)。

世界的に見ても日本人は細かな流儀や作法を大事にする国民性だと思いますが、この「そば打ち」においても、手順一つ一つに面白みがあり、また単なる「料理」ととどまらない奥深さがあるので、これを極めたいと思う人が大勢いることが分かるような気がしました。地域によって流派があるとも聞きましたので、もっと突き詰めて行けば、さらに奥深い「そば打ち」の世界が待っているのかも知れません。「お客さんが来たら、30分で仕上げ、出来立てのお蕎麦でもてなす」と講師の長沢さんが話されていました。こんな粋なおもてなしを、いつか自分もしてみたい、そんなことを感じたイベント参加になりました。



【感想文】 友の会 45 周年記念行事 講演会 記念登山 「山が教えてくれたこと」
「三戸呂拓也と行くフィールドゼミナール - 鷹狩山トレッキング -」

登山家三戸呂拓也さんとの 2 日間

早川 伸一

大町山岳博物館友の会の創立 45 周年を祝し、登山家の三戸呂拓也さんの講演会と、鷹狩山でのフィールドゼミナールが 2 日間にわたり開催され、私はその両日とも参加する機会に恵まれました。

三戸呂拓也さんは大町市出身で、映像制作やテレビの登山サポート、国立登山研究所の講師を務める一方で、海外の高峰への登山を続けている登山家でもあります。ミウラ・ドルフィンズのスタッフを務めていたことから、講演会の直前まで、三浦雄一郎さんの富士山登頂のサポートを行っており、忙しい中、講演会に駆けつけてくれました。満席となった講演会では、登山家三戸呂拓也さんが大町高校山岳部と明治大学山岳部で培った経験、「イッテQ」や「グレートトラバース」などのテレビ番組のサポートの裏話、そして海外遠征登山の話など、興味深く、想像力を刺激する話を聞くことができました。明治大学山岳部（植村直己を輩出した）では主将を務め、その伝統ゆえの重圧を抱えつつも、リーダーシップやチーム作りを学び、また長期にわたる冬山合宿などの体験を通じて、多くの学びを得たことが感じられました。クーラカンリ遠征では、先行した仲間が雪崩で亡くなるという悲しい経験をされました。先行メンバーになっていれば自分自身が雪崩を受けていたかもしれないという現実。遺族からかけられた言葉。そして、山に登るといふ個人的な行為は、それを支えてくれている様々な人たちによって成り立っているということに気づかされました。心に深く響く話が聞けました。

翌日に行われた鷹狩山フィールドゼミナールは、西田隊長を先頭に、三戸呂さん、そして大町高校で山岳部顧問をされていた大西先生も同行され、大町高校山岳部のトレーニングの場でもあった鷹狩山を、22 名の参加者と登りました。大町高校インターハイメンバーを、鷹狩山山頂までのタイムトライアルで決めた話、鍬ノ峰の仏崎観音寺コースの開拓整備の話などを聞きながら、ゆっくりと山頂まで歩きました。昼食はアルファ米パック（水を入れて登山中持ち歩いていた）と、昼食準備メンバーが作ってくれた具沢山の豚汁を頂きました。食後には、三戸呂さんが映像制作に使われるドローンを操作し、上空から全員の記念写真を撮ってくれました。始終、ゆったりとした和やかな 1 日となりました。三戸呂さんは山頂を極めるだけではなく、そこに付加価値をつける仕事をされています。北アルプスの玄関口、大町市出身の「登山家」として、百瀬慎太郎のように幅広い活動をされるのではないかと思います。今後どのように活躍されるのか楽しみであり、これからも応援したいと思った 2 日間でした。

烏帽子の会

活動報告 《日向山》

《月日》11月11日（土） 《天気》曇り時々晴れ 《参加者》12名

《コース状況・感想》

登山道は整備されていて歩きやすかったですが、ところどころ段差が大きく崩れているようなところもあり、足腰に少し堪えました。登山口からすぐの登山道には赤や黄色の落ち葉が地面いっぱい広がって下を見ながら楽しめましたし、カエデの紅葉もちょうどよかった感じでした。

《コースタイム》

大町市役所 6:30～スイス村 7:00～小淵沢 IC 7:55～白州道の駅 8:08 トイレ休憩～駐車 8:40～登山口 9:00～日向山頂上 10:50 お昼 下山開始 11:45～登山口 13:15～駐車場 13:30～白州道の駅 13:50 解散

《感想》

今回心配事は2点ありました。まず1点は駐車スペースがあるかどうか？ 2点目は天気もってくれるかどうか？でした。下見に行ったときに尾白川渓谷駐車場に車を停めました。そこからだと登山口までかなりの急登を1時間歩かないと行けなくて、私たちの年齢を考えて登山口のすぐそばの矢立石の駐車場もしくはその周辺の少し広いところに車を停めようということになって集合時間も30分早めました。やはり矢立石駐車場はいっぱいでは停められませんが、下見の時に狙っていたスペースに無事駐車することができました。天気も大町はあまり良くありませんでしたが、さすが晴天率の高い北斗市で青空も見えるぐらい天気が良くなりました。これで心配事はすべてクリアになりました。

みんなに感動してもらいたかった登山道からは想像できない天空のビーチには全員でまとまって「せ～の」で登頂しました。「うわ～！」と期待通りの感想が聞けて担当としてとてもうれしい瞬間でした。体調不良で不参加になった仙波さんにもぜひ見てもらいたかった景色です。仙波さんリベンジしましょうね！

もうひとつのびっくりは若い人が多いことです。天空のビーチがインスタ映えするからでしょうか。

帰るころにツアーの団体で私たちと同じ世代の方がたに会えて思わず私たちと同じ年代の方ですね～と声をかけている人がいました。

往復3時間半ぐらいでしたが途中急登もあり登りがいのある山でした。



活動報告 《スノーシューで巡る黒川城址・伊折》

《月日》2月3日（土） 《天気》晴れ 《参加者》12名

《コース状況・その他周辺情報》

大町からの参加者が11名に減った為車は2台の配車となり、当初トイレは南小谷駅と思っていたが、太田が途中乗車の為、塩水バス停で合流してトイレを済ませた為少し早めに駐車場を出発した。

雪が少ないため黒川まではスノーシューをかかえて出発した。道すがら小谷雨中の地形・成り立ち・旧小学校の跡など案内の澤渡さんから説明があった。

真木道からスノーシューを履いて四ツ辻峠を目指す。雪崩予防の為NTTのケーブルが牧集落まで埋設されていて地上に1から36までのポール（目印）が立っている。四ツ辻峠は15で、それが登っている目安になってもう少し、もう少しと足を進めた。昔「真木」では米が作れないので下のほうまで出作（でさく）に来ていた。田んぼ跡（今は平地に杉林）やせんげ（湧水を集めた）ゆきつばきもところどころに見られた。雪の中に埋もれていないとゆきつばきは冬を越せず今年は雪が少ないため枯れてしまうということだった。

また動物の足跡がたくさんあり（うさぎが多く、てん・きつね・たぬき・かもしか・いのしし・りすなど）、何の足跡か興味深く観察した。

黒川城は狼煙をあげたりした見張りの為の城で途中「天水池」「横堀」などの看板が立てられていた。城址自体は平らで木がぽつぽつ植えられている。目の前に白馬コルチナススキー場の「グリーンプラザ白馬」のスイス風の赤い建物が見えた。

かつて1983年公開されカンヌ映画祭でグランプリを取った今村昌平監督の「檜山節考」の映画が2年間「真木」の集落でロケされた。それで途中で見られた「真木」にちなんでお昼の時間に深沢七郎の「檜山節考」の姨捨のおりんと辰平の場面の朗読をした。また「ふるさと」の歌を唄って下山の途についた。

途中イノシシを見た人もいたようだ。下山はひたすらスノーシューで伊折まで、その後脱いで南小谷駅まで歩いた。南小谷駅には丁度「キハ」「リゾートビュー」「あずさ」が並んで停車していて写真スポットとなった。

このコースは令和4年にも計画されたが、天候不良で中止になったコースである。今日は天候にも恵まれて実施できて良かった。

《コースタイム》

大町市役所 7:50～塩水（トイレ休憩） 8:40～南小谷駅駐車場 9:10～真木道口 10:00～四ツ辻峠 11:10～黒川城址 11:50 昼食 12:45～伊折 13:50～駐車場着 14:20～大町市役所 15:40

《感想》 素晴らしかったスノーシューハイク

常山 幸子

スノーシューをはくのは友の会主催のアニマルトラッキングに参加した時以来の二回目。

新潟県南魚沼の豪雪地帯で生まれ育った私は、「雪の中をわざわざ歩きに行くなんてとんでもない」とずっと思っていました。今年度、例会が所用と重なりなかなか参加できず寂しく思って



いたので、思い切って参加しました。

久しぶりに皆さんにお会いしたら、なんかほっとしました。薄日が差す最高のコンディションの中、川崎さんが手配して下さった福島さんのスノーシューをはき、雪を踏みしめて歩きました。登りも下りもスノーシューはなかなかの優れものです。今回は「凍み渡り」のような雪のところも多く歩きやすかったのかもしれませんが。子どもの頃、春先に兄弟や従妹と「凍み渡り」をした懐かしい思い出がよみがえってきました。新雪が深ければまた違った体験になったことでしょう。



澤渡さんの豊富な経験と深い知識に裏打ちされた素晴らしいガイド。小谷村を愛し、そこで暮らす人々を慈しんでおられることが伝わってきました。太田さんのリードのもと林の中で「高原列車は行く」「ふるさと」を大声で歌って気持ちよかったです。圧巻は「櫛山節考」の朗読。冷たい雪が舞う中、母坂本スミ子が背負われ姥捨てに旅立つ、母を連れていく息子緒形拳、二人の姿と声が浮かび、涙があふれてきました。小谷村がロケ地だったこと、初めて知りました。真木集落の共働学舎を訪ねてみたいと思いました。

リス、テン、イタチ、ウサギ、キツネ、カモシカ、イノシシ…たくさんの動物の足型。カモシカの寝床、ブナについたクマの爪痕。クロモジ、クルミの冬芽など観察できました。でも皆さんが「イノシシがいる」「あれカモシカじゃない」「タカだね、珍しい」などと声を上げていても、残念ながら私には何も見えませんでした。

ユキツバキは雪の下で冬越しするのに今年は雪から出ていて凍みて枯れるかもしれないと聞いて考えさせられました。一本で一反歩の田を賄えるというブナの木。いつか雨の中、山に登りブナの木の下に流れる雨水を自分の目で確かめてみたいです。

小谷村の街並みの変遷、土砂崩れ、地形の変化、小中学校の統廃合など小谷村の歴史や暮らしについても教えていただきました。中でも真木集落に向かう道沿いにあった水田の跡、道の途中の小屋での物々交換のことが特に心に残っています。澤渡さんが18年間ずっと毎日横断歩道で子供たちの安全を見守っていらっしゃることに敬服いたします。真似はできません。

車の中での話。早川さんご夫妻はヒマラヤベースキャンプツアー参加に備えて毎日長峰山登山、赤沼さんは週二回ペースで光城山登山、丸山さんはジム通いで体力作りに励んでいらっしゃるとのこと、見習いたいです。

冬の自然を満喫できたスノーシューハイクと同じくらい仲間との触れ合いが心に残った例会でした。早川さん、川崎さん運転お疲れさまでした。澤渡さん、太田さん本当にありがとうございました。



◎次回山行は高社山を予定しています。桜の時期に合わせたいと思っています。

サークル烏帽子の会へのお問い合わせは、事務局（電話：0261-23-6334）まで（サークル人数が多くなったため、烏帽子の会の新規募集はしていません。）

ボランティアサークル

ボランティアサークル 松本市立博物館研修

1月28日午後、17名の参加で行いました。

市内の大手町に昨年新しくできた博物館は、3階に常設展示室、2階に特別展示室を持ち、1階は講堂や学習室など、多目的に使われています。もちろん、奥には大きなバックヤードがあります。

常設展示は、入口の200年前の松本のジオラマを導入として、交通の要衝、商都としての発展、自然環境、民族などを、比較的整理した形で展示しています。

今回は、市民ガイド(市民学芸員)の山本さんにご案内いただきました。地元の方ではないということですが、会社員を終えたのち、ずいぶん勉強されたのだと思いますが、どのコーナーも話したいことがいっぱいという引き出しの多さで、1時間余りご案内いただきました。知らないことへ大きな興味を持つことと、コミュニケーションを大切にしたいという気持ちでガイド活動をされているということ、私たちも大いに勉強になりました。

ボランティアサークルへのお問い合わせは、事務局（電話：0261-23-6334）まで



ゆきつばき通信編集室より

今回の通信は令和6年度の総会のご案内などになります。昨年の秋から冬の事業の報告や感想もたくさんいただきました。ありがとうございました。

通信も来年度には200号に達します。「ゆきつばき」のバックナンバーは整理できていますが、通信も整理しておかなければと思っています。定期で「ゆきつばき」が出せるほど原稿が集まらないようになって、お知らせや報告が中心だった通信に感想なども載せるようになって久しいですが、ページもだいぶ多くなっています。シニアの多い会のためあまり字を小さくすることもできず、しばらくこんな感じの通信になるかと思えます(今年は送料がだいぶ値上がりになりそう)。

通信は、博物館のホームページからもPDFで閲覧できるようになっています。モバイルでも見られますので、外出先で読んだり、また、お知り合いにも紹介いただければと思います。

(丸山卓哉)

ゆきつばき通信 第198号

発行／大町山岳博物館友の会 2024年2月25日

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1

大町山岳博物館内 山博友の会事務局 Tel/Fax 0261-23-6334



山博ページ <https://www.omachi-sanpaku.com>

友の会は、山博の情報発信のために山博ホームページの維持に協力しています

